

## 南新二・投書の粗描<sup>あらがき</sup>

明治十五、十六年

池田一彦

明治十五年、南新二の投書は『東京絵入新聞』には一篇のみ、あとは全て『読売新聞』に掲げられている。

一月四日の「配り初めの附録」の一つとしての「○人<sup>からだ</sup>躰<sup>からだ</sup>のうち親睦会」は、「日就社の新年会に大福引の思ひ付で容々<sup>さまく</sup>の器物が陳列して有る中」に「人間の身<sup>からだ</sup>躰<sup>からだ</sup>のうちの眼耳鼻舌を初めとして」人の各部が「一体のうちで有りながら疎遠に過るハ遺憾なり」と親睦会を催す趣向の滑稽文、「○歳玉<sup>としたま</sup>の順達」(明15・1・21)は、「二三軒勤めて鯛も暑にあたり」という狂句同然、年礼に海苔の「到来物<sup>もらひ</sup>を順達」したら「十枚有るべき一帖の海苔が七枚で其上に上の二枚ハ新海苔だが跡ハ古<sup>ひね</sup>の漉返<sup>すきかへ</sup>し」で赤面したという話、続く「○人間の末痴<sup>まつち</sup>」(明15・1・25)は全文以下の如し。

或日朋友<sup>ともだち</sup>が年始に来て(此人が来ると例<sup>いづ</sup>投書<sup>ていしよ</sup>へおしまひだが)いふにハ昨夜<sup>ゆふべ</sup>一寸したことで大いに悟ツた一件有りサ夜中<sup>よじゅう</sup>小児<sup>こども</sup>が目を覚して灯りが消たから付てお呉といふからオツト承知と枕辺のマツチを取て付や

うとしても狼狽<sup>あわて</sup>る為<sup>せい</sup>か火が出ないと小児ハギヤア／＼云<sup>い</sup>マツチハ倍々<sup>ますます</sup>付ずエ、忌々<sup>いまくし</sup>敷<sup>し</sup>と腹立紛<sup>ふ</sup>れにマツチを投<sup>な</sup>出して軋<sup>こら</sup>りと寐<sup>ね</sup>ながら「マツチ濡<sup>しめ</sup>ッて小デレぢれ込む半夜頃<sup>よ</sup>」と鼻唄<sup>はなうた</sup>をうたひ出すと小児<sup>こども</sup>がマ<sup>マ</sup>チが濡<sup>しめ</sup>ッたのでハない那父<sup>おとつ</sup>さんハ逆さまにこすッたのだよトいふから今度<sup>いま</sup>ハ好後<sup>こうご</sup>先<sup>せん</sup>を探<sup>たづ</sup>ッてチウとやると忽<sup>たちまち</sup>地灯<sup>ぢとう</sup>りが付て寐<sup>ね</sup>たがなるほど人間も此通り肝心の握り所が違<sup>ちが</sup>ッて居てハ何<sup>なん</sup>ごとも用に立<sup>た</sup>ず金<sup>かね</sup>を拵<sup>も</sup>へやうと思<sup>おも</sup>ッても真<sup>ま</sup>の儉約<sup>けんやく</sup>の道<sup>みち</sup>を取違<sup>ちが</sup>へ只吝嗇<sup>しんさく</sup>にばかり傾<sup>かた</sup>いて居てハ何時<sup>なんじ</sup>までも黒暗<sup>くわん</sup>天<sup>てん</sup>のまツくら闇何<sup>やみなん</sup>でも逆<sup>さか</sup>なことハいけな<sup>い</sup>いのサと話<sup>わ</sup>して帰<sup>かへ</sup>ると次の間<sup>ま</sup>（即台所）から愚妻<sup>ぐさい</sup>が顔を出して今<sup>いま</sup>の人ハ年始<sup>としはじめ</sup>に来てお屠蘇<sup>とろそ</sup>も出さなかつたので腹でも立<sup>た</sup>たか大變<sup>だいへん</sup>に当<sup>あた</sup>ッコスツテ行<sup>い</sup>たちやあ有<sup>あ</sup>りませんかと口惜<sup>くしやく</sup>さうにいふゆゑ拙生<sup>せつせい</sup>もぬからぬ顔<sup>おもて</sup>で自己<sup>おれ</sup>もコスラレテ顔から火が出るかと思<sup>おも</sup>ッた

「なるほど人間も此通り肝心の握り所が違<sup>ちが</sup>ッて居てハ」云々が教訓<sup>きょうくん</sup>、諷刺<sup>ふうし</sup>の氣味もちよつぱり有<sup>あ</sup>つて「自己<sup>おれ</sup>もコスラレテ顔から火が出るかと思<sup>おも</sup>ッた」が標題<sup>たいぎ</sup>の「○人間の末痴<sup>まふし</sup>」の種<sup>くさね</sup>を明<sup>あ</sup>かしたオチの本文<sup>ほんぶん</sup>、よくよく考<sup>かん</sup>えると毎度<sup>まいど</sup>「投書<sup>とうしよ</sup>」の仕舞<sup>しまい</sup>い役<sup>やく</sup>の「朋友<sup>とも</sup>」が冒頭<sup>ぼうとう</sup>に置<sup>お</sup>かれたからして「逆さま」であつたと何やら得心<sup>とくしん</sup>させられる風の戯文<sup>ぎぶん</sup>である。マツチを「燐寸<sup>りんすん</sup>」と書<sup>か</sup>かず「末痴<sup>まふし</sup>」と当<sup>あた</sup>てたのなどもひと工夫<sup>くわふ</sup>あつて新<sup>あらた</sup>二らしい。

「○雪ハ憎むべし愛すべからず」（明15・2・12）は、「隣家<sup>りんか</sup>の妻君<sup>さいきみ</sup>」が雪を見て「悪いものが降<sup>ふ</sup>ます」と挨拶<sup>あいさつ</sup>するの<sup>の</sup>は「不風流<sup>ふふうりゅう</sup>」と思<sup>おも</sup>いつつも「墨堤<sup>すみづち</sup>の艸屋<sup>そうぐや</sup>」を「乞食<sup>しき</sup>劇場<sup>げきやう</sup>の孫右衛門<sup>そんえもん</sup>然<sup>しか</sup>たる姿<sup>すがた</sup>でヒヨコツカ出掛<sup>でかけ</sup>る身<sup>み</sup>」の自分<sup>おれ</sup>には矢張<sup>やじやう</sup>り賛成<sup>さんせい</sup>せざるを得<sup>え</sup>ず、「派出所<sup>はしゅしよ</sup>の查公<sup>さこう</sup>」も「船頭<sup>ふねがしら</sup>」も「悪い物が降<sup>ふ</sup>ますの組<sup>ぐみ</sup>合<sup>あ</sup>」かと思<sup>おも</sup>案<sup>あん</sup>、次のよう<sup>よう</sup>な結論<sup>けつろん</sup>に至<sup>いた</sup>る。

シテ見る日になツて見て見ると雪を愛<sup>あい</sup>す人のうちに十八九までハ怠惰<sup>なまけ</sup>者<sup>もの</sup>にて職業<sup>しごく</sup>を勉強<sup>べんきやう</sup>する人ハ誰<sup>たれ</sup>でも悪い

物の方なるべし故に（真の雪ばかりでなく雪に縁<sup>ちな</sup>みの富士額や雪の肌までも）憎むべし愛すべからずデゲス併し是を一寸聞<sup>き</sup>と負惜<sup>かみかへ</sup>みのやうだが篤<sup>あつ</sup>と思考<sup>おもひ</sup>て見てもヤツパリ負惜<sup>かみかへ</sup>みらしい

当座の「風流」より「米櫃<sup>こめびつ</sup>」（生活）が大事、それでもどこか「ヤツパリ負惜<sup>かみかへ</sup>みらしい」というのである。「按ずるに筆は一本也、箸は二本也。衆寡敵せずと知るべし」とも通ずるものがあるような。

「墨水の陶工三浦乾也氏の家」で入手した「盃洗」と「水酒」の話（明15・4・21）は、文中、

（「盃洗」と「水酒」を——筆者）持帰<sup>かきかへ</sup>ツて重て置<sup>お</sup>と（やッぱり大例の通り）此兩器<sup>ふたしな</sup>が其夜話<sup>ばん</sup>しを初めやしたのさ余り古めかしいから聞まいと思ツても耳へはいるから否々<sup>いやく</sup>聞て見ると

とか、終りに、

是から如何いふ答へをするかと思ふ所でソレ例の夢が（覚るのも余り古いから）ツシリと一ツ寝返りをして跡ハ春眠曉を覚えずサ

と、みずから「古めかしい」「古い」というコメントを付しているのが注目される。日に日に近代化が進み行く御時勢の中で、新聞の「投書」も例外ならず、常套の手法や趣向が「古」びたものになってくる、それも重々承知の上で倦むことなく南新二は「投書」を書き続ける。常套を「古」いと認める如くでありながら書かずにはられない、そこに一つの氣質が見てとれよう。「古」いから良いとか悪いとかという問題ではなく、既存の形式に則<sup>したが</sup>ることが心地よく楽しければそれでいいのだ。ちよつと悪びれて見せるのも芸の内、「余り古めかしいから聞まいと思ツても耳へはいるから否々聞て見ると」の「否々」は飽くまでポーズに過ぎず、實際は相も変わらず「文章」の上で戯れ遊んでいる南新二がそこにいる。

「○何故此様に苦勞性だやら」(明15・5・25)は、この年唯一「北古三」の筆名を用いた一品。「子が一人欲しいといふのが苦勞の原因」で、医者がみな吞せろという「会請丸」を吞ませて目出度く「会任」したが、「此子の生産するまでにハ未九年(オヤ長い)の月日を経なければ成ぬ」のが心配で、また医者に相談すると「今度ハ名々の薬法がガラリと違ひ自由湯を用ひろといふ人も有り改進黨に限るといひや帝政湯でなければならぬの何湯を飲せろの種々な薬法が有る」ので困ったという話。南新二に珍しい政治的寓意がある。

若薬法の論が盛んになつたら大勢の中にハ白刃湯が早くツていゝとか砲彈丸でおツ払へのと(ソナ痴愚な医師が有るものか決してないことハ実印を富士講の行衣ほど押てお請合申が)云出された日にハ大變だわエ云々とある箇所は、括弧内の大仰な言いぶりがどこか後年の斎藤緑雨を想わせる。

この年、唯一『東京絵入新聞』に寄せた「○茶毘所の臭氣」(明15・5・27)は、当時不衛生な臭氣の出所を推理したもの、「故に彼製造場(伊勢勝の靴の製造場——筆者)より発するの臭にてハなく其外の我利く亡者(亡者の名臭氣に縁有り)屁茶無苦連(屁も又縁有り)野郎の斯る悪臭を発して我々に迷惑を掛るものなるべし」と「人民保護の御役人」に訴えかけている。以下、墨水の流燈会に「絵心」の必要を説き(明15・7・14)、「何でも彼でも悪いくとへたやたらに怖がるのハ一件の来るのを待も同じこと」とコレヲ予防の心得を説いた「○御注意々々々」(明15・7・25)、七月二十三日に始まる朝鮮の壬午の軍乱に言寄せた川柳「残念閑氏謙と晒落て居る場でハなし」の前文「○袖手傍觀の時」(明15・8・22)、「日本で茶人が珍重する高麗何々と唱へる陶器」の朝鮮本国での秘底を伝える『報知新聞』の記事に「蒔画物」や「刀剣類」を「茶色な眼の人」や「髭の赤い人」にドカリ売りつけてきた日本を憂える「○朝鮮の陶器」(明15・9・21)と続く。あとは、

○往昔千の利休が（言たか如何だか保証ハ出来ないが凡江湖の相場が茶のことなら利休歌ハなぜか西行俳諧なら芭蕉狂歌が蜀山人裁判で大岡さま古いことハ権現さま時代御成先の古跡なら三代將軍さま浄瑠璃ハ近松門左衛門其外何でも彼でも水戸黄門さまや弘法大師に背負込ませる例に寄て是も利休に背負込ませるとして）或茶人に書て遣ツた三条の壁書に曰く

として茶の湯心得三箇条を説いた投書（明15・9・30）、「投身」の多いのに歯止めをかけるべく「其処で拙案有りサ此不体裁とも醜態とも申やうのない所を写真にして揭示場へ出し此容になるが是でもいゝか名前や町所が知れると委敷記て写真屋に売らせるぞとて聞せ」たらどうかと提案した「○ポンくくく」（明15・10・5）、「それ猫といふ間に四人前になり」という狂句のある通り「平常猫に物を十分喰せた方が算盤が持る」訳合いを説いた「○飼猫ハ食に飽しめよ」（明15・11・19）といった実際向きの投書が見られた。

明治十六年。この年は、恒例「配り初めの附録」絵画共進会のうち「○第二区狩野派のつらね」（明16・1・4）を初めとする「○月の弓張紙の由来」（明16・3・29）同7・27 全六回）、「○飢饉の夢」（明16・8・19）同8・23 全二回）、「○物の嫌ひなのを芸とす」（明16・10・25）の四篇が『読売』に、残りは全て『東京絵入』に掲載されている。

この年、最大の収穫は何と言っても「○月の弓張紙の由来」、南新二の全投書活動中でもその創作としての完成度の高さ、内容・表現の面白さ、発想の奇抜さは特筆に値するだろう。冒頭に、

○近頃ハ投書が余程むづかしくなツて拙などの文盲にハチトお齒がたちかねる一件となツて来たゆゑ白面隠

しに黄表紙じみた途方もないことをお眼にぶらさげること左の如し

の文言を見る。ここには、明治十年代における小新聞の投書の変容という大きな問題もあるにはあるが（因みにこの年、当時代表的な投書家であつた高島屋塘雨が八月に、中坂まときが十二月に身罷つてゐる）、それはまた別の機会に譲るとして、ここはその後半に着目すると、新二は所謂「白面隠し」にひとつ「黄表紙じみた途方もないこと」をブチ上げてみせようと言うのである。時代錯誤は重々承知の上、何事も徹底するならそこにはいつそ爽快さが漂おう。『絵のない絵本』ならぬ（絵のない黄表紙）——或いはそれ自体自家撞着かも知れないが、却つて言葉、文章の呼吸というものがより重要性を帯びてくる。言葉が、文章が生きていなければ到底目も当てられぬ無惨は必定、面目躍如か丸潰れか新二一代の賭けをしたとも言いつべき作が本作であつた。

主人公「飛だり屋羽根助」が折から来訪の朋友「乙渡奇名齋」に説いて言うには「世界といふものハ狭いもので別にお珍しい国もなく何処からどこまで開けて仕舞ひ濡手で粟といふ金儲ハむづかしく成て来たが僕がフト思ひついたのハ我地球を離れて月の都へ交際を開き毛唐人輩のしやくりを止てやらうといふ法」で、現に「英国の究理学者ミテハーチル氏が月中を望遠鏡で見たら」山やら川やらはては「噴火山から煙が立」つのが見え、「又一種の望遠鏡を發明して此奴で見ると今度ハ人のやうなもの」まで見え、更に「無類飛切といふ望遠鏡を拵へて見ると丁度其日がイヤサ其夜が月の都のお祭りで（ナニサ嘘でなしさ）山車のやうなを引出して騒いで居る体が随に」見えたという事なので、その先の工夫とて「僕が新奇妙案吃驚仰天といふ發明をして近日出掛る積り」だといふのであつた（第一回、明16・3・29）。さて、「月中へ出掛る法」だが、「爰に困る一件ハ我地球の圧力を離れると彼人間必用の空氣が流通しなくなる」ことで、「勿助」は奇名齋に「一昨年の冬新富座で波の底親睦会と

いふ浄瑠璃<sup>アヤ</sup>を仕たとき音羽屋が着て出た水潜り機関<sup>きかん</sup>ハ劇場<sup>しやばう</sup>の道具だから極輕いと思考<sup>かんがへ</sup>つけて借込む積りだが足下ハ下に居てセツセと空氣の仕送りを仕て下ツし」と依頼、「風船などいふ面倒なことをペケとして身軀中へゴム風を鈴なりにくツつけて線釣<sup>おやつ</sup>り三番叟の鳴物でチツレチレトツ、ントチツレチントツ、ンと御苦勞ついでに口三味線も頼むことゝして善ハ急げといふから明日の朝天氣がよかつたら出掛<sup>でかけ</sup>ると極<sup>きま</sup>」て、翌朝「張子の機関を身にとまといゴム風を無闇に結びつけ」無事昇天とは相なつた(第二回、同4・12)。

抑々<sup>そもく</sup>月の地球を離<sup>はな</sup>ること(エートお待なさいよオ、夫<sup>それ</sup>く)大雜書三世相等に巨細<sup>くはし</sup>ければ爰に略す諸前<sup>しよぜん</sup>にも申通り月も一大世界にて国を分ツて十三七ツとす其うちにもマダトシヤ州ワカイの国といへるハ大国のきこえ有りて独立の帝國なり(爰で一吋御断り申のハ月中の人種ハ身軀が人間で首<sup>いづ</sup>ハ何れも兎なりマア早く申せば西遊記の八戒に似て十二神の卯に當る神軀の如し但し是等から思ひついたかも知れず)帝<sup>みかど</sup>を子<sup>しめこ</sup>帝と稱し奉<sup>ほう</sup>つり春宮<sup>とうぐう</sup>をコロの宮とぞ申ける

「御国内野々様郡井屈村」へ降り下つた「奇なる動物」の処遇について「左大臣サラサの臣<sup>おし</sup>右大臣エリマキの臣」の争うのを「聞ある月卿雲客ハスハ珍事こそ出来たれり如何に此場の納るならんと赤き眼と眼を見合せて耳をひそめて居」るのであつた(第三回、同5・8)。続きの掲載はひと月半後、間の開いた弁明文がまた妙文だつた。

諸はや皆様御待かねの(誰も待ハしない)ダガサ江湖<sup>せけん</sup>ハ広いから一人や半分ハ(イヤ夫も受合<sup>うけあふ</sup>ことハ出来ない)ト聞て見ると我面白<sup>われおもしろ</sup>の人困らせながら後を早くと御鼻<sup>しきり</sup>様より頻に御催促下され共(嘘)新二去頃より眼病にて(同)何分にも聞<sup>い</sup>しく(眼病で聞しいものか)夫<sup>それ</sup>あちらでも御用とおツしやるアイく社用でと駈

廻るゆる月の世界が雲に包まれ久敷顔を出さずに居たのを如何いふ風の吹廻しやら出し榮もせぬ顔ながら今度ハ結末まで日就社の投書函へぶちこみましたから前号を御覽の看客ハお関係ゆる御迷惑ながら御笑覧の程を願ひ上ます

「我面白の人困らせ」とはまた愛嬌のある言い分で（南新二に縁の深い手柄岡持に『我おもしろ』の家集有るのも思い合わされる）、「眼病」の言い訳が笑わせる。（）括弧の使用が最も効果的な文章の一例でもあらう。さて、話元に戻り、両大臣の争いを押しとどめ「メ子の帝立出給」い曰く「朕一ツの工風有り彼を飼置べき函を造り一方を金網張になし底をバ竹にてすのこにして藁を敷きらずを与へ函の外より見るべしと。羽根助はと言えば「月の世界近づきしと思ふ間に月中の圧力に吸込まれ世界へ真逆さま生死も知れず」、気がつけば「異形の人物が寄集まり羽根助の口へ挽茶を押し込みコレ旅の人デハナイ落の人氣を髓に持なさいと云ので有らふがチンブンカンブン何をいふか少しも分らず」慌てて逃げ出すのを「生捕れ伏籠のうちに明し暮」らす破目と成ったのであつた（第四回、同6・23）。帝の勅覧に供されて後、羽根助はどうにかして宮中を逃げ出そうと「工風」する。と、羽根助は「飼役」の「木賊といへる宮女」が深切に世話をするのにつけ込んで「兎面ハ下さらねど身軀ハ立派な宮女ゆる綿羊を抱から見れば余程上等」と思案を定め「彼木賊の来ることに妙な眼つきをして見せると兎社会の女だけに木賊ハ余程の刎ね者にて何時か妙な訳になり待夜ハ耳の長きを恨み逢夜ハ前足の短きをかこ」つ仲になる。で、少しずつ「辞が解る」ようになると羽根助は木賊に駆け落ち話を持ちかける。「毎年八月晦日にハ闇見の御遊」が催されるので「其夜を待て逃出し安野江海手の浜づたひに陀阿蓮陀荷葉の里を経て尾満山の麓なる知己の方へ落行」くことになるのだが、衛士等がいるに予定替え、「木賊ハ羽根助を背負上御園の前なる泉水へ



身を踊せて飛込」んだのだった（第五回、同6・27）。ここで「道行旅のうさく」が語られる。

「緑樹蔭沈むで魚樹に昇る気色あり月海上に浮むで女波男波のめをとつれ「あんの山からこんの山越て細ふて長ふてピンと列たハ何々ぞチャツとすゐした三日の月晴て夫婦となりたさに神に願ひを掛牡のお前に能似たいとし児を海手の浜の板庇苦もる月の桂男が覗くハ恋の訳知らず「大事のお月さま雲めが隠すとても隠すなら此纏帯で結んで結んでしめて解くハ樹下の笠の紐「秋の日足も前足も短き縁しの二人連たどりたどりて来たりけり

木賊の古郷に向かう途次、「サア是からハ山路ゆる私の肩につかまツて転ばぬやうに氣をつけやと音に聞えし噴火山のカチく山とハ夢にも知らず高根はるかに登り行」き、思わず足をすべらせて溪間に落ちれば突然の噴火起こり、二人は月から地球へ逆戻り——。

憐むべし二人の者ハ手も足も焼ちぎれ眼鼻を纒に存するのみ其姿ハ図するが如し張子に造るみづく達磨の由来ハ斯とぞ知られける（看客曰）オキヤアガレ

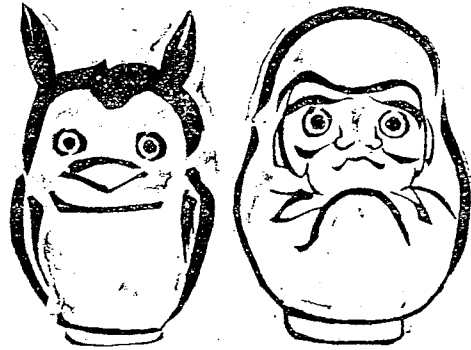
以上が最終回（同7・27）で、つまるところ「張子」の「みづく達磨」の由来だと言う訳だが、文中の「図」が『輕妙集』（明治四十年十一月十五日 初山書店発行）には略されている。後に『東京絵入』に掲げた「○大雷頭上に轟く」に添えられた新二の署名入りの図や『輕妙集』の表裏見返し図と筆のタッチが俳画風に似ていなくもないので、ひよっとすると新二自筆のものかも知れない。参考までに掲げ置く（二一六―二一七頁参照）。

『読売』続きで言うところ、「飢饉の夢」が、例の落し斬風で良く出来ている。「小生或夜飢饉の夢見たり」で始ま

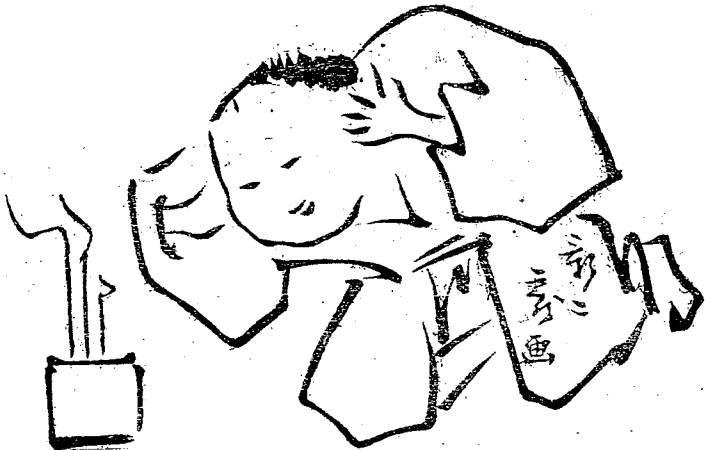
るが、「凶作」の飢饉で  
 「茲に困ったといふのハ  
 人間が飯を喰はずと済こ  
 とになつて幾日経ても腹  
 が減ず其の代りに尿をた  
 れることもなしサア茲が  
 飢饉の原因で肥料に乏し  
 い所からソラお米が出  
 来ないヨシカネ所ろが喰  
 はずと済むから平々酒蛙  
 々々喰はないから尿も出

ない尿が出ないから米が出来ないから（ア、最沢  
 山）只万一身軀を働かしてドカと尿が出たら喰はずにハ居られ  
 まい何卒ビチとやりたくないものだと出さないやうに／＼と心  
 掛ける」ようになって「遊歩などする人」「腕車」「茶屋小屋」

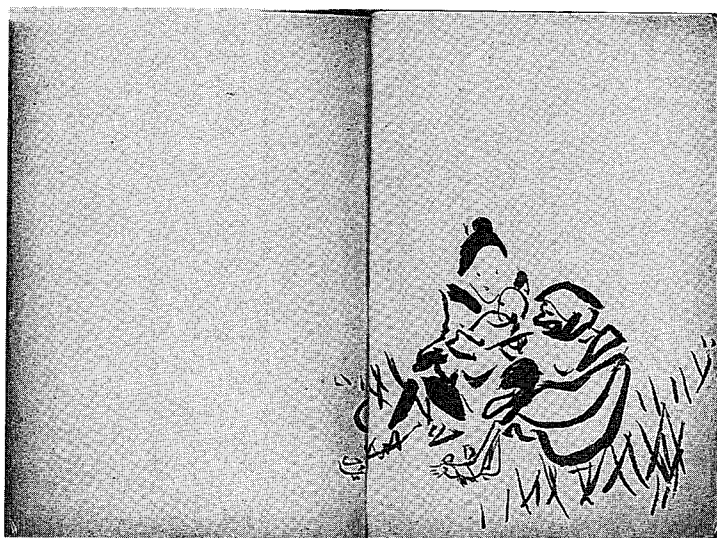
「芸妓」「医師」みな暇で、遂には「何でも運動させるのが肝心だからお祭りでも賑やかにやらか」そうというこ  
 とになる（明16・8・19）。「逼迫尿のお祭り」とて、「童名を阿児尿」と言った「紀の貫之の山車」以下さまざま



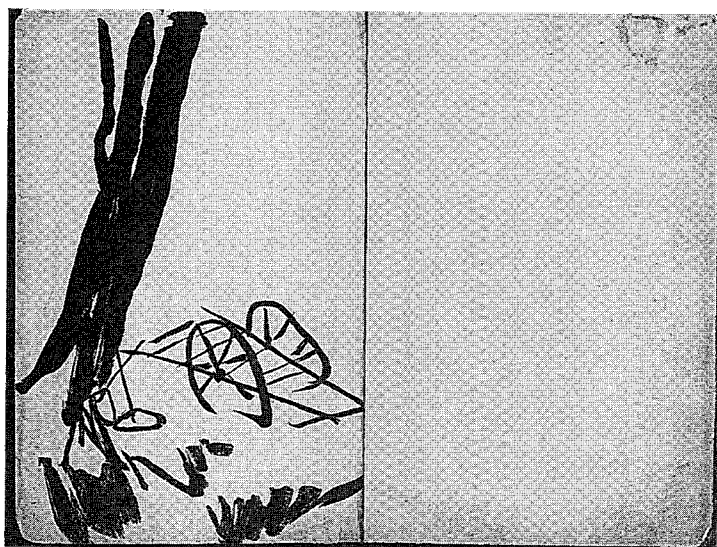
○月の弓張子の由来より



○大雷頭上に轟くより



『軽妙集』表見返しより



『軽妙集』裏見返しより

に工夫を凝らして見るが効果は無い。

斯<sup>や</sup>ドンチャン廻<sup>わ</sup>ッてもヤツパリ大屎のたれ人<sup>て</sup>へなく到底<sup>つまり</sup>逼迫屎のたれ損にて弱り果たる其中で悪い時ハ悪

いもので小生の家へ強盜が舞ひ込み白刃を鼻の先へ突つけて生命が惜いなら尿を出せ返辭次第で生命がねへぞと威しつけられて齒の根も合ずへい／＼有ると申程へ出ませんが只今放まして上ますと一寸遁れを言へいツたが無袖（でへない）無尻の振方もなく力一ぱいに息張て眼を白く黒くして居るとエ、埒の明ねへ早くしろと責たてられて七転八倒サヤウに御催促ウーンなさいましてウーン何分ウーン急にハウーンと苦しむうちにフト氣がついて尻を竊と探りエ、痴愚な夢を見るものだ既に大事をやらかす所を宜都合に目が覺たので先ハ無難で目出度し／＼（同8・23）

またしても「夢」の話——だが、結末のクライマックスへ向けてこれも良く語られたお話ではなからうか。明治十年十月十九日の『東京絵入』に掲載されたものと同工の作と言えるが、勿論こちらは何の教訓臭も無い。「ウーン」とさんざん唸って「フト氣がついて尻を竊と探」る辺りが秀逸で、読者も思いきり作者の感嘆「エ、痴愚な夢を見るものだ」に共感するという仕組み、「○月の弓張子の由来」同様にたわいのない馬鹿馬鹿しさに笑みも自ずとこぼれよう。総じてこの年は、『読売』の方に「作品」としての自立性の高いものが投書されたと言つていいと思われる。

さて、ではもう一方の『東京絵入』に眼を転じよう。

「世間が不景氣だ」と誰も言うが実感できない、「シテ見ると彼徒然草の鬼のたぐひで不景氣ハ人の口頭（くち）に有りて現に其物の江湖（せけん）にぶらついて居る理屈でへない事と漸頃（やうく）日承知仕つたて果して然らばモウ／＼飯令口が腐つても不の字を言ずに稼ぐことゝ固く極」めたと言う「○不景氣追出しの御相談」（明16・7・5）、看板に「艶集流」とある怪し氣な茶の稽古所で通された四疊半の中をよくよく見ると「掛物ハ根岸辺でひとところ頻に出来た小堀宗

中の偽物なれども其文ハ利久の壁書とかいふもので其うちにも面白いと思つた文ハ。茶臼を急に廻せば茶あらくして味ひなし只怠らぬやうにせよ。湯を一柄杓<sup>ひしやく</sup>汲<sup>ひ</sup>水を一柄杓<sup>さす</sup>注<sup>す</sup>べし。一時に水を注<sup>す</sup>バ用をなさず」とあり、  
 「諸々<sup>むかし</sup>往昔の奴ハ（オット失敬）人ハ旨<sup>うまい</sup>いことを言たもので遣つたと思ふ程づ稼いで埋れバ盆でも暮でも野の宮高砂（別条なしといふこと）」と感心したという「○茶の湯の奥の手」（明16・7・22）と続くが、実はこれ『読売』に前年載せた無題の文章（明15・9・30、前出）の焼き直して、前のは「三条の壁書」として「○茶を挽人早く挽おろさんと思ふべからず只怠るまじと思へ○茶釜以下の道具ハ穢<sup>よご</sup>垢<sup>あか</sup>づかぬうちに洗へ○釜の湯ハ一柄杓汲取らバ一柄杓の水を入<sup>い</sup>れ俄に水を注<sup>つ</sup>バ其湯用をなさず」と記し、「ナント昔の奴（余り失敬）昔の人ハ旨いことをぬかして（是さく）云て置でハ御座らぬか無闇に急ぐよりも怠らぬが肝要垢のつかぬうちに洗へバ穢る間ハなし遣つた丈づゝ入て置バ何時でも一杯子ソレ分りましたかエ、ぢれツたい」と結んだのだつたが、今回は前置きが長く、物語風に綴っている所に相違を見る。投書で、他人の文章を字句少し替えて載せようという所謂「剽窃」は時折問題になるのだが、それは投書家としての名を広めようとの卑しき心根に出るものが多い。南新二の場合は、飽くまで自作の作り替へであり、焼き直しと言っても何ら徳義上の問題とはならないであろう。発表紙も異なっており、一般読者も『読売』派と『東京絵入』派とあつて、逆に二紙共に購読する者の少なかつたであろう事を考え合わせれば、なるだけ多くの人に読み且つ心に留め置いて欲しいという投書作者の願いをこそ読み取るべきかも知れない。但し、一方で「投書」のネタが少しづつ限られて来ているという事情もあるにはあるので、この年の『東京絵入』への投書の何本かが、地方新聞紙の記事からの抜粋・紹介という形を採っているのも、或いはその辺の消息を物語っていると認められようか。子供への菓子との与え方を教諭した「○先ハ小

児だ」(明16・7・28)の後の無題のもの(明16・8・3)がそれで、

○各地方の新聞紙を見るに国ごとに風土人情の異なるハ言までもなければ至る所同じきまなるもの三ツあり不景氣、淫売、祭事の花麗りっぱ是なり何故に此三事のみハ全国異なることなきやと不審いふかしきことに思ひしに阿波の徳島なる普通新聞(七月廿一日二千百四号)を見て彼三事ハ鼎足のごとく相連ることを知りたり(知れたことを遅時に)且文意も我東京の人民に大に適するが如くなれば抜摘して左に掲ぐ

#### 盆踊りの風説 (本文略——筆者)

阿波の徳島の人情も東京と變ることなし併しあ前の文ハ一年に一度踊る盆踊りなればさる弊のあるも恕すべし我東京ハ二季に踊り或ひハ三ヶ月目或ひハ毎月踊るために身代を踊りつぶすもの一にして足らず普通新聞の記者先生も只自国の盆踊りをのみ痛論せらるゝにハ非ざるべし嗚呼怖おそいかな此踊りや

というもの。右に略した「盆踊りの風説」本文は長いもので、途中三箇所新二による削除があるが、新二の紹介文の約二倍の分量が延々引用されている。紹介文という事もあるのだろうか、ここに南新二の色々個性は認め難い。文章に生彩が無いのだ。地方新聞紙つながりで言う、『福岡日々新聞』の記事を紹介、自説を展開した。「○海水浴」(明16・8・23)というがあり、こちらはまた新二にとつてこの年一番の手痛い結果をもたらした。次に、それについて見ることにしよう。

福岡の須崎の海水浴の景況を報じた『福岡日々新聞』の記事を紹介する内に「只遺憾なるハ同所ハ別に茶屋小屋などもなく余儀なく衣類ハ砂上へ脱たるまゝ入浴するゆゑ後に其衣類を着するに炎熱のため火の如くなりこれを直すぐに着れば却つて健康を害することも尠せうなからず云々」とあつたのに対し、

「何と驚く可き訳でありませんか。是が海水浴が海水浴たるもので譬へていへば鯛の浜焼といへば結構な物と極つてゐるが魚河岸から買て来たのへ串を打て厨丁のこしらへたのハ浜焼の真似で丁度東京の海水浴と一般理のものサ其の浜焼ハ漁士がろくく鱗も取らずに藻塩木を掻集めて焼たのをいふ名なれどもイヤハヤ黒焦の穢らしい物に相違なし。諸君の海水浴といふものハ海辺の国でハ何処にも有ることにて土用中海岸へ出掛て男も女も処女も細君も管主も丁稚もフリ（否）振にも形にも構はず日光で火のやうになつてゐる砂へ大きく穴をあけ潮を汲込むで置と直に湯のやうに熱くなるソコデ例の焼石などの上へ衣類をぬいでポカカ達みア、宜心持だなど云ながら声自慢の人が当こみ有りかなにかで（垢をするとして真日中を湯にハ沸せハせぬものを浜辺へ晒す炎天顔ザブリとたつた一桶の上湯が浴たいく）など平気でやらかしてゐる（か如何だか）是を東京の人にチトお出掛ハ如何といつてもオヤ行たいねへ所かお構ひなくお先へといふの外ハ有りますまい

と述べたのだった。右に続き「サア其無類飛切自由自在の地に住みながら怠惰たい飲たい喫たいなどいふ場違ひの鯛を好み身代の浜辺へ大きな穴をあけて向ふ水を何程かいこんでも焼石へ水で温まる間ハ少しの中果ハ首つたけはまつたぎり粥吸欲も心にまかせぬ者ハ却つて東京に其多きを見る住居ハ鄙でも都でも子ソレ兎角那奴が肝心ですて」と、終り際こそ洒落た教訓めかしているが、しかもそちらこそ新二の強調したかったことなのかも知れないが、当時まだ必ずしも一般的でなかった「海水浴」についていかにも真実らしくいい加減な想像で語ってしまった所に落度は有った。おそらく南新二の投書歴において初めてと言ってよい反論・批判の出現である。「政談無主義翁」の「○南新二君に問ふ」（明16・9・2）がそれで、「海水浴と云ものハ海辺の国でハ何処にも有

る事にて」云々の箇所を引いて「福岡の須崎の如き片鄙ハ知らずさる野蠻の一種異りたる海水浴の何処にも有る事を聞ず」「新二君ハ何れの地にて砂を堀て海水浴をするを見られしや」と詰問し、又「眞の浜焼」の件についても「是れも亦疑ハし新二君ハ何れの地方にて穢ならしき浜焼を喰れしやハ知らねど余ハ松茸の山焼と鯛の浜焼を以て山海一対なる無上の珍味と思へり抑天造物と人造物ハ何れを清潔とせらるゝや」と迫り「君が高論ハ総て意表に出て余が想ふ所とハ霄壤の相違なれバ君が眞の海水浴と称せらるゝ者と穢き鯛の浜焼を食されし地名を問ふ而已海水浴ハ砂を堀たる穴へ入ものならざる事及び冷温波動の論ハ号を嗣で陳述すべし」と結んだものだった。新二のこれへの返答は、新二の自画像入りの「○大雷頭上に轟く」(明16・9・9)で、

瓦落く転く叱りピカく(天窓でハなし)斯大転々大叱りと来られてハ小生平常のお喋りをやらかすどころか大凹みの大閉口コレく早く原稿エ、間違つた線香を釣つて蚊帳を焚てくれるソラ又お叱あそばした観音経を出してくれるオ、それだく普門品第二千四百六十七号入絵新聞投書欄内政談無主義翁先生論擊筆鋒吃驚仰天桑原くア、是でハ阿保陀羅經じみる寧のこと夜着を冠つてお念仏としやうと狼狽きはまる所へ隣家の主人が出かけて来てコレ、最お叱りも薄くなつたから夜着の中から出現してもよからふぜ私が雷嫌ひの平癒といふ薬法を知つて居るから書つけて来たと懷中から出すのを見ると

一負惜 三匁 一厚皮 五匁 一シャーツク 三匁 一チヨビスケ 十匁 一受売 一匁 一早吞込 五分 一屎度胸 三匁

右海水一ぱい入理屈一式に論じつめて用ふべし但笑話ハ一へぎも入ず

食物差合○白玉○酢豆腐



此次の雷神さまハ余程強さうだから早く飲がい、「まだ此上にお鳴なさるのですかイヤをいつハ大変だア、桑原くゝ万歳楽くゝ

というもの。俗に言う鳩が豆鉄砲を食らった形で、精一杯おどけて見せてはいるものの新二平生の輕妙さにやや欠けるのではなからうか。洒落で済ますだけの余裕に乏しいのは「但笑話ハ一へぎも入ず」辺りからも感じられよう。「海水浴」にまつわる事実誤認という負い目がある上に、こう理屈一点張りて責め寄られては流石に新二も言葉に窮したものの如く、自らの戯画を添えた所以でもあらう。因みにこの後「政談無主義翁」は「○海水浴の弁」(明16・9・19)を投じ、『衛生局雜誌』の記事などを援用、「余ハ此論を以て強ちに新二君に抗撃を試むるにハあらねど新聞ハ片鄙僻邑にも至らざる所なければ若海水浴の適度を知らぬ田舎者が新聞にある海水浴を信じて体の健康になる為と思ひ誤ちて却て身の害を招く砂中の海水浴を始めハせぬかと思ふ老婆心を言」つたのだと述べて論難を終結している。

明治十六年の他の投書について概観しておこう。「○旧情脱すべし」(明16・8・17)は、「雷神門」再建の話をして「明治年製の連中」も「お向ふの細君さん」も「隣家の細君さん」もピンと来ず、「ハテナと考へて見ると雷神門の祝融に罹りたるハ文久三年のことで今を去こと廿一年の昔ゆゑ三十年以下の人ハ妙な門が出来たと驚くなるべし斯して見ると上野の山に芸妓の三絃を聞き見附の榊形に電馬の声を聞くにも懐旧の情を催すなどハ老込りのすてつぺん古い事ハ以来知らぬ顔くゝホイまた清洩で原稿をよごした」というものの、例の新二の口癖「老込」の二字が見られる。「○物忘れ」(明16・9・21)は、「朝鮮屋」という酒屋の主人が「記憶が悪い」権吉に「現金で買に来たら樽の酒を直に注で遣るヨシカ切手の客なら玉川を交て遣るのだぞ」と教え置いた所へ、使

いの三太郎が切手を持って一升買いに來たので権吉は水の酒を出してしまふ。「小言をいはれて権吉ハ漸思ひ出し『南無三方今日ハ酒を交るのを忘れた』という落し漸だが、本文中程に一字下げで新二の断り書きが入っているのが『輕妙集』には省略されている。次に引いて置く。

コレ／＼新二またしても／＼生意氣なスツポカシを言てへないか酒屋で玉川を割のに買に來る度毎に交たり交なかつたりするといふ酒屋が有ものか酒屋の法則を知らずハ言て聞せやう「へい／＼毎々小言で痛み入まするが此笑話ハ酒屋の内則を調べますのでへなく事を酒屋に托してお話しを致すまでゞございますから酒の割やう酒のお講釈ハ他日ゆる／＼御教諭を願ひませう尤も斯いふことを致すのハ例の朝鮮地方の酒屋で日本にハ決して有ますまいから御安心を願ひますと危険だから先お断り申おいて偕本文に取掛るといふ程の一件でもないのサ

今日「危険」なのは、むしろ新二の「朝鮮」観かも知れぬが、これは新二だけの差別的意識の表われと言うよりも当時一般の日本人の意識がそうであつたという事で、歴史的資料として扱ふべき類のものだろう。「○流行物の考」(明16・10・4)では、「外国人が日本絵タイサンよろしい雪舟元信探幽日本古画皆々名人私し国油絵ペケ／＼とドシ／＼買込むところから偕ハ古法眼も雪舟も探幽も皆々名人であつたかとお氣がつかれ」る日本人を諷刺、「是からハ魚類が流行」(其次ハ読売新聞に出たる仏国の多だが此一件ハ既に函右日報の謾録記者先生も)ソリヤまた多點が流行るぞの)名文を掲げ」ていたが、「併し斯まで日本人が何事も外国人の言ことを信じて疑はぬ正直なる性質だとハ(仏国の)ダールマアさんでも氣がつくめエ夫とも知つて居るか如何だか」と結んでいる。途中、英國で魚類が再認識されたと述べつつ「鱸のあらひタイサンよろしい鯛の浜(危険ぞ)鯛のうしほ鯉

の刺身皆々よろしいなど、粹な事をいふ様になつたから」云々とあり、先般「鯛の浜焼」に懲りた一件を茶化して見せたりしているのが興味を引く。「○大奮発」(明16・10・6)は、「夢中子」なる者が次から次と友人達に勧められる物を奮発して買い込んだ挙句、又別の友人に「煙艸入を見てナアルホド強勢な奮発だ羽織も御新調と見えるし上布もガラがよく帯も本場と来てゐるから申し分ないがモシ夢中子お腹へた、れなだが斯くまで奮発揃ひとなつた以上へとてもの序に一体の人間をもう少し御奮発ハ如何」と言われたという話。「○刺繡の発明」(明16・10・21)は、「米国なるボルチル氏ハ電氣をもつて何のいけさうさもなく刺繡の出来る奇法をオツ始められたり」との事で「サア此発明が我日本へ広まつた日にハ痛い思ひを自慢らしくする痴愚ハありますまい」「爰において自然に刺繡ハ有害無功と相場が極つて方に一ツも心得違へる者のなきにいたらんこと二の腕の命にかけて確く保証仕り候也」といった啓蒙的な(?)文章であつた。

この秋、『読売』に寄せた「○物の嫌ひなのを芸とす」は、人さまさま嫌いな物の出来る訳が有る内に「又一種の嫌ひあり我性質の奇なるを人に示さんために何々ハ嫌ひなり何虫を見れば一步も進むことを得ずなど」と是を一芸の如く心得て自慢らしく人に語」り「常ハ不自由なれども是非なく一種の嫌ひとなるの類」であると言う。斯ることハ物の好嫌ひのみにあらず根もなきことを云出て後へも先へも取かへしのならぬにいたること江湖に甚多しさる片田舎に独身の男ありしが食物に異なことを好み牡丹餅にもあれ饅頭にもあれ砂糖の甘きを加ふるハ真味を失ふなりとて塩ばかり入たるならでハ喰はず蕎麥ハ殊に好なれども汁のために味を損ずるとして汁なしに喰ひぬ人々可笑きことに思ひて今日ハ塩の牡丹餅を振舞はん汁なしの蕎麥を喰はんかとて癖のために所々へ招かれて馳走になることなりしが七十二といふ齡に重き病ひに罹り頼みすくなく打伏居たるに

或人病床を見舞ひて其方も取齡なれば今度が長い別れかも知れぬ死期に言置こともあらば告よ喰ひたきもの  
 ハなきかといへば彼者涙を流して妻も子もなき身に言ひ置ことの何かあるべき併しながら終焉に只一の望  
 みあり聞入たまはんやといふにぞさることを聞んとし来りしなれば何ごとにもあれ望みの儘になさんと念頃  
 なる辞を聞て倍々涙にむせびつゝ声うち密め甚申憎きことなれども世に在るうちに一度ハ蕎麥に汁をつけて  
 喫たきものなりと言しとぞいとあはれにもをかし

斎藤緑雨の「おぼえ帳」「日用帳」等の隨筆にも相通するような感慨がこの一小話には見て取れる。「いとあは  
 れにもをかし」——人世をかく觀する所に南新二の境地は落ち着くものの如くである。

さて、『東京絵入』の方に戻つて、「○呪術」(明16・10・27)は、久兵衛に「仲間うちの無尽」が取れるよう  
 「お呪術」を頼んで金を持たせ「断食」していると、案に相違して金は取れず、「イヤサ無尽ハ長助が取たが呪術  
 の不思議なことにハ足下の圖とタツタ一番違ひ」と答えたというオチの有る話、「○始めを忘るゝなかれ」(明  
 16・12・2)は、「獵を好むものハ獸を得ざるの前ハ其創の小なるを恐る是ハ獸屈せずして逸しざるを恐るゝな  
 り已に是を得れば肉を傷るの多きを恐るまた美人かしこに居れば我に許すことを欲し我妾となれば人に許すこと  
 を欲せず(チーン南ア無阿弥など、偶に耳学文を担ぎ出したからと言って交ツコなし) 諸はや人間といふものハ実  
 に手前勝手千万なもの」で、万事「始めを忘るゝ所から人の交際も忽地に不和となり店たて地たての迷惑を来た  
 す」のだと教え諭した「爺氣の廻つた投書」であつた。「紀念碑ハ近年のはやり物」とて「猶思ひ出し語り出し  
 有志者の尽力にて設立ありたき」紀念碑を十七ばかり並べた「○紀念碑」(明16・12・16)と、同じく「遣ふ」を  
 二十四も列ねた戯文「○人間万事遣ふことばかり」(明16・12・27)でこの年の南新二の投書は締め括られる。